

兵庫県豊岡市竹野町の地蔵盆

清水 邦彦[※]

問題提起

前々号（第25号）、私は「京都の地蔵盆の宗教史的研究」（以下、清水2010とす）と題して、地蔵盆で祀っているものは何かという問題を論じた。というのも、但馬地方の地蔵盆を分析した大森恵子は、そもそも祖霊への供物であった桑団子の変形とされる盛り物を地蔵に捧げることがを以て「地蔵盆は祖霊祭でもあっただろう」（大森1998：p.249）と述べている一方、滋賀県の地蔵盆を分析した林英一は、「地蔵盆の行事は「子供が遊ぶ」ことを主な目的として行われ」（林1997：p.41）、「滋賀県（補一の地蔵盆）ではこのような性格（註＝先祖供養）が明確に認められる地区は少ない」（林1997：p.168）と述べていたからである。地蔵盆は祖霊祭か否か？清水2010では、この問いに対して、京都¹の地蔵盆を分析した。京都を分析対象としたのは、最も盛んに地蔵盆が行われている地域であり、また各地の地蔵盆の源流と考えられるからである²。結果、京都の地蔵盆は、子どもの為の祭りであって、祖霊祭的要素は希薄である、という結論を出した。但し、この結論は大森説の否定ではない。私が分析したのは京都の地蔵盆である一方、大森が分析したのは但馬地方の地蔵盆であるからである。清水2010執筆時、私は、但馬地方の地蔵盆を見たことがなかったので、大森説への論評は避けた。2011年8月23日、ようやく兵庫県豊岡市竹野町の地蔵盆を拝見し、現地の人々にお話を聞く機会を得ることができた。この成果と大森や林等による調査報告、種々の文献を活用することによって、竹野町の地蔵盆を分析し、清水2010の補足としたい。

なお、広領域である但馬地方の内、竹野町を調査地に選んだのは、大森の対象地域の一つであった（大森1998：pp.234～251）こと、江戸時代の文献が存在する（後述・林1997：p.234）こと、の2点を理由とする。

1 竹野町概要

竹野町は、兵庫県最北部に位置し、日本海に面している。かつては城崎郡に属していたが、2005年以降は豊岡市に属する。面積は約103平方キロメートル。江戸時代の34ヶ村が徐々に合併して竹野村となり、竹野町となる。現在の主な産業は農漁業及び観光業（海水浴場）である。

※金沢大学国際学類准教授

2 竹野町の地蔵盆

上記の如く、竹野町は広い範囲を有しており、現在でも39地区³から成る。私1人による調査だったので、実見できたのは、竹野と須谷の2カ所のみである。但し、和田字太田に於いて、路傍（全但バス和田停留所付近）の3体地蔵には何もなされていなかったのは確認した⁴。従って、竹野町といっても実見したのはごく一部に過ぎないが、実見しなかった地蔵盆を文献から事例として扱う。

結論から言えば、現在の竹野町の地蔵盆は、大森の云う通り祖霊を祀るものである（但し、もともとは祖霊というよりは未だ祖霊にはなっていない死霊といったものを祀るものだったと考えられる・後述）。竹野・須佐の人々にお聞きすると、「地蔵盆は先祖を供養するものだ」といった趣旨の発言が相次いだ。

そもそも現在の姿を見る限り、京都の地蔵盆と竹野町の地蔵盆とを同じ「地蔵盆」というカテゴリーに含めることが間違いである。以下、京都との比較を中心に、竹野町の地蔵盆を分析する。

京都の地蔵盆は、主に地域内の地蔵に各町が供物を捧げるものであるが、竹野及び須佐の地蔵盆は、地蔵に供物を家族が捧げるものである。竹野に関しては、共同墓地の門内にある地蔵、須佐に関しては円通寺門前くるま堂⁵の地蔵及び円通寺境内の地蔵に供物が捧げられる。そして、竹野の地蔵盆に於いてはその際、墓参りを伴う⁶。現地の人々からは、「竹野では、現在、地蔵盆には特別な事を行わない。ただ8月23日に墓参りをするだけである」というようなことをお聞きしたが、実際は、一他地域の者からすれば「墓参り＋地蔵への供物」である。京都の地蔵盆は通常、墓参りを伴わない⁷。

もう一つ、大きな相違は、祭りの主体である。京都の地蔵盆は、各町会が主体となって行われるに対し、竹野・須谷の地蔵盆は家族を主体として行われる。また祭りに要する時間も大きな相違である。京都の地蔵盆は1日ばかり（町によっては2日ばかり）で行われるが、竹野・須谷の地蔵盆は、地蔵に供物を捧げるものであり、墓参りを伴ったとしても、せいぜい30分もあれば十分である。

もっとも竹野町の地蔵盆は、かつては鐘・太鼓を鳴らす行列が行われ、その際、地区によっては子どもが供物・賽銭を募ることも行われたことが文献（竹野町史編纂委員会1991：p.411・大森1998：p.234）及び今回の聞き取りから確認される。従って、かつては、子ども集団⁸も地蔵盆の運営に大きく関わっていたと云える。また、神原では、かつて⁹は地蔵講が地蔵盆の主体であった。（竹野町史編纂委員会1991：p.405・後述）なお、鐘や太鼓を鳴らす行列といった、地蔵盆の削られた部分の代わりとして、8月23日の夜、森本地区森本中学校で変装盆踊り大会が行われるようになったと云われている。この変装盆踊り大会は、おおよそ1970年代に行われるようになったものである（竹野郷土研究会1979：p.142）。私も今回の調査に当たり、変装盆踊り大会を拝見したかったのだが、宿泊予定場所より到底歩ける距離ではなく、タクシーを使える環境でもないで、今回は断念した。ブログhttp://blogs.yahoo.co.jp/toyooka_kankou/archive/2010/9/8及び

<http://blogs.yahoo.co.jp/kohmas501/352563.html>を見る限り、変装に関しては「欽ちゃんの仮装大賞」的である。今後、宿泊場所を調整の上、拝見したいと思っている。なお、大阪の地蔵盆では、古くから変装が行われてきた（田野1994：pp.6～7）。但し、日本の祭りで変装が行われることはさほど珍しいことではない故、地蔵盆の日に行われる竹野町の変装踊りが大阪からの影響かは定かではない。その起源等の分析も合わせて今後の課題としたい。

話を地蔵盆に戻す。京都と竹野町との大きな相違として、大人が子どもを接待する行事であるか否か、ということが挙げられる。京都の地蔵盆は、現在、子どもを喜ばす為に大人が創意工夫し、子どもが自由に遊ぶ行事である。戦後しばらくは、福引き及びこれに伴う「ふごおろし」（福引きの品を2階から竹籠で下ろす）・映画鑑賞・紙芝居・スイカ割り为主だった（小林1975：p.275・吉村1995・服部比呂美2010：p.243・佐野2004：pp.76～77）¹⁰が、今日ではビンゴゲーム（これも福引きの変形だが）や輪投げ等各種ゲームが行われ、昼食はマクドナルドのハンバーガーであることが多い。

なお、京都の地蔵盆に関し、清水2010発表以後、黒田2002：p.255により、長尾2002a：p.488に、江戸時代の地蔵盆は大人の宴であり、子どもの祭りとなったのは明治以降とする言説があることに気づいた。長尾の論拠は、「京の町々地蔵祭りあり。・・・酒もりして遊べり」（滝沢馬琴『鞠旅慢録』日本随筆大成版第1期第1巻pp.232～233）である。私は長尾説に賛同しない。現在の京都の地蔵盆に於いて、子供が遊んでいる横で、大人がビール片手に談笑しているのはごくありふれた風景である。また、かつては確かに「一人前にならないと酒は飲めなかった」と云われていたが、祭りの場に於いて厳密に子どもの禁酒が守られていたかは疑問である。ちなみに未成年飲酒禁止法は1922年成立であり、その成立には幾多の困難があった¹¹。「酒もりして遊べり」の記述のみから、大人の為の祭りとするのは早計であろう。清水2010で述べた通り、京都の地蔵盆及び前身である地蔵祭は子どもの為の祭りであると解釈すべきであろう。なお、伏見のまちづくりを考える研究会1987：p.172には「大正時代から昭和初期にかけての時代、地蔵盆は子どもが楽しむだけでなく、大人も一緒に町内全員で楽しむ行事でした」とある。

これに対し、竹野町の地蔵盆は、少なくとも竹野・須谷を見る限り、大人が子どもを接待する行事ではないし、子どもが自由に遊ぶ行事でもない。家族でのお出かけは小さい子ならば、喜ぶかもしれないが、京都の地蔵盆とは、現在の姿を見る限り、別物と見なすべきだろう。

なお、竹野町羽入にある金亀院（真言宗）には、1782年に書かれた『年中行事』が伝わっている。全編は活字化されていない¹²が、林英一が地蔵祭に関する箇所を活字化しているので、これを以下、引用する。

一、廿三日晚坂中石地蔵尊二燈籠一ツ奉ル事、

一、廿三日晚、羽入村地蔵祭り・・・、両寺同道ニテ庄屋迄参り、非時等了テ、暮方ニ地藏堂ニ参り、先三礼、理趣経・讃廻向（又ハ宝篋印タラニ）・地藏宝号五十返程・光明真言五十返程・・・次制札場下地藏尊前ニテ先三礼、観音経・宝篋印陀羅尼・弥陀大咒三礼・地藏宝号廿一・光明真言廿一、次庄屋戻り仏前ニテ宝篋印陀羅尼一返・尊□陀羅

尼・弥陀大咒・光明真言七返了ル。(林1997：p.243・読点及び・・・は林による。非時は食事の意)

これを見ると、庄屋の家の仏前で読経を行うことが記されており、「読経は、この家の先祖供養として捉えることができるかもしれない」(林1997：p.245)。少なくとも、江戸時代、現・竹野町羽入では、地蔵祭が家を中心に行われたこと、先祖供養の面があったことは読み取れ、また、子どもの遊びが記録されていないことも確認できる。これらの特徴は現在の竹野町の地蔵盆と共通している。なお、竹野町史編纂委員会1990：p.373に記載される、神通寺(竹野地区・真言宗・廃寺)の『年中行事簿』でも「地蔵祭」とされており、当時は地蔵祭という呼称であったと考えられる。

実見には及ばなかったが、竹野町の地蔵盆の特異事例として、井戸の上に地蔵を安置し、子どもが祀るというものがかつてはあった(竹野町史編纂委員会1991：p.410・大森1998：p.234)。現地の人によると、そうした風習は廃れてしまったらしい。私も竹野地区を大分歩いたが、井戸を見かけなかった。

京都と竹野町との相違として、開催日程が挙げられる。京都では、現在、8月下旬の土曜もしくは日曜(もしくはその両日)に行われることが多いが、竹野町では、依然として、8月23日に行われる。但し、この相違は根本的なものではなく、主体の相違によるものに過ぎない。京都も1980年代までは8月23日・24日に行われていた¹³が、町会にサラリーマンが増え、平日に開催することが困難になったため土日に移動したと考えられる。また、前述の、地蔵盆に要する時間も関連している。京都の地蔵盆は、少なくとも半日はかかり(さらに準備の時間もかかり)、平日のサラリーマンが行うのは難しい。これに対し、竹野町の地蔵盆は30分もあれば十分である。サラリーマンであっても、地元勤務であれば、なんとか時間の工面が可能であろう。ゆえに竹野町では依然として、8月23日に行われているのである。

3 竹野町の地蔵盆の起源を求めて

1) 仮説の提示

以上見てきた通り、現在の竹野町の地蔵盆は先祖供養を目的とする祖霊祭であって、京都の地蔵盆とは全く異なるものである。では竹野町の地蔵盆は如何にして成立したのだろうか? 作業仮説として、とりあえず以下の3つを提示する。

- ① 竹野町の地蔵盆は、京都各地の地蔵祭(現・地蔵盆)の影響を受けて成立した。但し、時間を過ぎる内に独自の変化を遂げた。
- ② 竹野町の地蔵盆は、京都各地の地蔵祭(現・地蔵盆)とは全く無関係に成立した。
- ③ 竹野町の地蔵盆は、京都以外の地蔵祭・地蔵盆の影響を受けて成立した。

まず①に関して考察する。京都各地の地蔵祭は鈴木正三(1579～1655)の語録『反故集』が文献初出である。

一、京中辻々の地蔵祭、去年より童部共、見事に致し候。(日本思想大系版p.325)

『反故集』は正三没後に弟子が編集したものであり、「去年」が何時を指すのかは不明である。しかし、正三の没年を考えると、1655年以前であることは間違いない。従って、1655年には京都各地で地蔵祭が行われていたこととなる¹⁴。一方、当然のことながら、現・竹野町で地蔵祭が始まった時期は分からない。絶対年代が分かるのは、先に引用した、1782年成立『年中行事』のみである。

そこで他地域との比較から考えたい。京都各地で発生した地蔵祭は時間とともに、京都外に伝播したと考えられている。大坂では少なくとも1680年には地蔵祭が行われ、現・福井県小浜では、1710年代には地蔵祭が始まっていた。小浜の地蔵祭は近江より伝播してきたと考えられる（服部2010：p.252）。近江の地蔵盆（江戸時代の呼称は地蔵会もしくは地蔵会式¹⁵）に関する江戸時代の記録はほとんどなく（林1997：p.134）、近江の地蔵盆が京都より伝播してきたことは文献では立証できない。近江と京都との関係¹⁶及び地蔵盆の類似性を考えると、京都からの伝播を想定するのは当然であろう。例えば、林1997：p.14は、滋賀県の地蔵盆の基本型として、「飾り付けられた地蔵の前で子供が遊ぶ」を挙げているが、これは京都の地蔵盆にも当てはまる。或いは地蔵盆の際、地蔵に化粧を施す¹⁷ことは京都・近江・小浜3地域いずれでも見られる。ゆえに京都→近江→小浜と地蔵盆は伝播したと考えられる¹⁸。京都との距離及び関係を考慮すると、竹野への伝播は小浜より早いとは考えにくい。江戸時代、京都－小浜間は18里と云われ、1里＝3.93キロメートルだと、約71キロメートルとなる。一方、京都－竹野間は車を使うと、約140キロメートルであり、距離的には約倍である。さらに、小浜は京都へ鯖を運ぶ鯖街道¹⁹の起点であり、京都及び鯖街道の中間地・近江との関係は密接であった²⁰。以上を踏まえると、小浜より早く竹野町に地蔵祭が伝わったとは考えにくい。竹野町の地蔵祭が文献で確認できるのは1782年だが、子どもの遊びが明記されていない点で、京都の地蔵祭とは全く異なったものであった。竹野町に地蔵祭が伝わったのは、距離等から考えて、小浜より遅い1710年以後であろうゆえ、70年も行かない間に大きく変質したことになる。竹野町で変容したとする仮説は不自然であろう。仮説①は成立しない。

②はどうだろうか？地蔵盆の成立については、先行研究で諸説あるが、江戸時代以前からの地蔵講を源流に設定する場合もある（安達1989：p.216）。地蔵講の文献初出は、『今昔物語集』であり、『今昔』では既に月の24日に行うものとされている（巻17第28話）。竹野町の多くの地区には地蔵像が複数存在する。しかし、竹野町に於いて、地蔵講の数は他の講と比べるとやや少ない。江戸時代以前から地蔵講が存在した証拠も存在しない。即ち、江戸時代（及びそれ以前）に於いて地蔵信仰が盛んだったとは云えない。それより何よりも、後述の如く、但馬地方では同様の地蔵盆が存在するゆえ、②も成り立ちにくい。

そこで③であるが、竹田町のある但馬地方各地には、共通点を有する地蔵盆が存在する（後述）ので、但馬地方全般に話を広げて考えたい。但馬地方の地蔵盆はどのように成立したのだろうか？京都の地蔵盆とはどのような関係になるのだろうか？竹田・須谷以外は実見していないので、調査報告書に頼るしかないが、概して、但馬地方の地蔵盆は、大人が子どもを接待す

ることはなく、地蔵に化粧を施すことが子どもの楽しみであることを除けば、子どもが自由に遊ぶこともない²¹（神戸新聞社学芸部1971：pp.249～252・東京女子大学民俗調査団1972：p.97・谷垣1973：pp.106～109・大森1998：pp.199～201）。但馬地方のうち、少なくとも竹野町竹野・須谷の地蔵盆は先祖供養を目的とした死者供養である。また、但馬地方全てではないにせよ、多くの地区で地蔵盆の際、盆踊りが行われる（神戸新聞社学芸部1971：p.252・大谷大学民俗学研究会1971：p.89・東京女子大学民俗調査団1972：p.97後述・大森1998：pp.200～201）。これも一種の死者供養であろう。これに対し、現在の京都の地蔵盆では死者供養の要素は希薄である。但馬地方の地蔵盆と京都の地蔵盆とは、こと現在に関する限り、別物と解釈すべきである。

2) 先行研究の整理—愛宕信仰との関係

私論を提示する前に先行研究を整理したい。大森は、但馬地方の地蔵盆の成立要因に愛宕信仰との習合を挙げている（大森1998：p.282）。昭和10年ごろまでは、但馬地方の山間部に於いて、地蔵盆の夕刻に、「「愛宕さんに火をしんじょう」と叫びながら、種々の形態の松明に火を点けて振り回す光景を、目にすることが一般的で」（大森1998：p.276）あり、愛宕祭りとの習合を想定することは可能であろう。愛宕山が但馬地方と比較的近いということを考慮すると、大森説は説得力を持つようにも思える。しかし、今回、実見に及んだ竹野町竹野・須谷に関する限り、地蔵盆と愛宕信仰との習合は一切見られなかった。先に引用した1782年の竹野村羽入の地蔵祭でも愛宕信仰との習合は見られない（地蔵祭の場である金亀院の裏手に愛宕社があり、愛宕講が活発に活動していたにも関わらず・竹野町史編纂委員会1991：p.222）。林は、竹野町史編纂委員会1990：pp.372～373に記載された『年中行事簿』（1808年）で、愛宕祭礼と地蔵祭とが別個の行事として記載されていること等から、両者は別個に成立した行事であったとする（林1997：p.255）。

大森は松明に火を灯す、万灯（もしくは愛宕火）という行事から地蔵盆と愛宕信仰との習合を説く（大森1998：p.282）が、死者供養に際し、火を灯すことは日本全国で見られる光景である。無論、松明という形は但馬の地蔵盆と愛宕祭りとで共通しているものの、主眼は火を灯すことであろう。また、江戸時代、京都の地蔵祭に際し、灯明をささげた²²が、これが但馬地方の地蔵祭（現・地蔵盆）で火を灯すことに転化した可能性もある（後述）。大森1998：pp.286～293が挙げている万灯・愛宕火の事例のうち、幾つかは8月23日に火を灯す事例に過ぎず、愛宕信仰との習合は明確ではない（林1997：p.260）。愛宕信仰との習合から地蔵盆の成立を説いた大森説は見直しが必要である。

3) 但馬地方の地蔵盆と亀岡市の六地藏めぐり

では但馬地方の地蔵盆は、どのように成立したのだろうか？但馬地方は中世より地蔵信仰が盛んであったと言い難い²³。ゆえにどこから影響を受けて成立したと考えるべきであろう（作業仮説③を継承）。竹野町を中心に但馬地方の地蔵盆の特徴を挙げてみよう。

1. 主に8月23日に行われる
2. 地蔵に先祖供養と同様の、供物が捧げられる。また同日、盆踊りを行う地区も多い。竹野町竹野・須谷では地蔵盆は先祖を供養するものという声が聞かれた。
3. その主体は家（東京女子大学民俗調査団1972：p.97）もしくは子ども集団・地蔵講・老人会（大森1998：pp.200～201）である。なお、家と子ども集団双方が役割分担して運営に関わるということは十分にありうる。朝来郡（現・朝来市）生野町上生野地区では、「盆の24日は六地藏で、ケンケラ講があって、子供組が世話してハナを集る。各家からおはぎをもって参詣する」（生野町文化財調査委員会1968：p.31）また、「香住町丹生地の地蔵祭りは、子どもが各自幸徳寺の石垣に棚を作り、その上に手製のお地藏さんや祭具を置いて祭り、主婦が重箱に入れて来たアンコ餅・はた餅などを供えてもらい、それを持って食べる」（谷垣1997：p.107）地蔵盆に関する先行研究では子ども集団が供物を分配する点に論点が置かれてきたが、供物は家で作られていたことも留意すべきであろう。
4. 子どもを大人が接待する行事は伴わない。また、地蔵に化粧をするのは子どもの楽しい仕事だが、これ以外に子どもが自由に遊ぶことは明確には見られない。
5. かつて竹野町竹野に於いては、井戸の地蔵を祀った。

結論を急げば、但馬地方の地蔵盆と類似面を有する行事が但馬地方の近隣で行われている。それは現・亀岡市及び園部町で8月23日に行われる六地藏めぐり（及び同日に行われる地蔵盆）である（名称の問題は後述）。亀岡市では、「地蔵盆の日（註＝8月23日）に、新仏の家の人が六カ所の地蔵尊を巡る」（宇野田2004：p.169・なお、だからといって、亀岡市の六地藏めぐりは新仏の家の人に限られていた訳ではない。竹田1993：p.385・亀岡市史編さん委員会2008：p.123）亀岡市では5件、園部町では1件の六地藏めぐりが確認される（鶴飼2002：pp.198～200）。特に広範囲から人々が参るは、曾我部の六地藏めぐりであり、ここから他の六地藏めぐりが成立したと考えられている（亀岡市史編さん委員会1996：pp.541～543）。仮に但馬地方の地蔵盆が自然発生したのではなく、他の箇所から影響を受けて成立したのであれば、亀岡市の六地藏めぐり（＋地蔵盆）が但馬地方に影響を与え、地蔵盆が成立したと想定される。以下、私がこうした説を抱くに至った理由を説明したい。なお、亀岡市外である園部町でも六地藏めぐりは行われているが、「現・亀山市域及びその周辺」では冗長なので、以下、亀岡市として論を進める。

亀岡市の六地藏めぐりは、亡くなって3年間を新仏とし、水塔婆供養を行う（宇田川2004：p.169・壺井・他2003：p.61）点で、京都の六地藏参（現・六地藏めぐり²⁴）の模倣と考えられる。新仏（あらばとけ・しんほとけ）は、仏典・漢籍に無い言葉であり、ある意味定義の無い言葉である。また、『日葡辞書』・各種『節用集』にも無いため、江戸時代以降の言葉である²⁵。中村元『広説仏教語大辞典』では「あらたに死んだ人の霊」とあるのみである。石田瑞麿『例文仏教語大辞典』では「新精霊と同じ」とあるので、これを引くと、「死後、はじめての盆にまつられる死者の霊。また、それをまつる新盆」とある。新仏を3年間とすることは「三年の喪に服す可し」（『礼記』「雑記下 第二十二」）という儒教の死者供養に由来するもので²⁶、仏教由来

ではない。盆に於いて新仏への灯籠は3年間というのはある程度全国共通という説もある（伊藤唯真1978：p.115）。但し、伊藤唯真は「新仏としての扱いは通常二、三年続く」（p.124）とも述べている。柳田1939：p.500は、「アラボン 新盆は其年の七月七日までに、亡くなった人の為に祭るといふところもあるが、・・・多くは其境を明らかにして居ない」とし、仏教民俗学会『仏教民俗辞典』では、「新仏（しんぼとけ）死んでから1年ほどまでの霊のこと。・・・」とある。新仏を3年とするのは全国的に確定していた訳ではない。

京都及び亀岡市で行われる水塔婆供養とは、薄い板塔婆（＝水塔婆）に故人の戒名・俗名を書き、桮等の葉で水をかけ、水の入った木箱に納めることであり、水回向とも呼ばれる。同様の供養は京都・六道珍皇寺の六道参りでも行われるが、この場合は桮ではなく高野槇が使われる（高橋1981：p.14）。「水塔婆」・「水回向」は『日本国語大辞典』・各種仏教辞典に記載がない。ゆえに京都及びその周辺で通用する言葉と推測される²⁷。新仏の期間を3年間とし、水塔婆供養を行う点が、京都と亀岡市とで共通しているのは偶然の一致とは思えない。亀岡市史編さん委員会1996：p.543は、「このような市域の六地藏めぐりは・・・京都の影響を強く受けているものと思われる」と述べている。なお、江戸時代、現・亀山市域から京都へ奉公に行くことが頻繁に行われていた（井ヶ田1984：p.222・亀岡市史編さん委員会2002：pp.614～615）。従って、京都の六地藏参（現・六地藏めぐり）→亀岡市の六地藏めぐりという影響関係が想定される。そして、亀岡市の六地藏めぐりと但馬地方の地藏盆とは死者供養という点で共通している（相違点は後述）。

ここで着目したいのは、京都にして亀岡市にしても、六地藏めぐりの主体が主に家であり、町会や講ではないことである²⁸。この点は、但馬地方の地藏盆とある程度共通している。但し、前述の如く、但馬地方の地藏盆は、かつては地藏講を運営主体とする地区もあった。竹野町神原の地藏盆は、村の全戸を構成員とする地藏講を運営主体としていた。この点は、京都の地藏盆が町の構成員を運営主体とする点と共通している。但し、神原の地藏盆は、前年の当番の家から当年の当番の家に地藏像を運び、当年の当番の家で地藏盆を行うというものである（竹野町史編纂委員会1991：p.405）。その点では廻り地藏の事例と見なすべきであろう。京都でも交代制で当番の家に於いて地藏盆を行う町がある（萩原・須藤1985：p.124）。亀岡市曾我部では六地藏めぐりと廻り地藏とが混合した行事が行われていた（松崎1977）。神原の地藏盆は曾我部より影響を受けた可能性がある（後述）。但馬地方全域を対象とした谷垣1973：p.107では「盆の地藏祭りは、二十三日か二十四日で、子どもが中心になって祭る例が多く、稀に村の当番・婦人会などで祭る例もあり」とある。但馬地方の地藏盆で、地藏講（＝村の構成員）を運営主体とする地区はある（あった）が、やや例外的と云える。

但馬地方で地藏盆は子ども集団が運営に関わることもあった。子ども集団も関わることは、亀岡市の地藏盆が子ども²⁹も運営に関わる（福知1993：p.164）ことが但馬地方に受容される際に若干変容したためと考えられる。即ち、亀岡の地藏盆からの影響と考えられる。なお、亀岡の地藏盆は江戸時代には地藏祭もしくは地藏会と呼ばれていた（亀岡市史編さん委員会1996：

p.539)。少なくとも1990年まで地藏祭という呼称は残っていた（亀岡市行事食研究会1990：p.46）。

『丹波志 桑田記』（原本1800～1802頃成立）には以下のようにあり、亀岡市亀岡川東の六地藏めぐりは、江戸時代には「六地藏順礼」と呼ばれていた。

不断山超願寺・・・大膳ガ菩提ノ為三字ノ地藏ヲ建立シ近六地藏順礼ヲ始メケルガ当時ニ至テ七月十四日諸人群参スルコト夥シ」（1939年書写・京都府立総合資料館所蔵本pp.64～65・鶴飼2002：p.201の指摘による・「十四日」は「二十四日」の書写ミスか）

この「六地藏順礼」という名称によって、直ちに六地藏めぐりが地藏祭と別物となる訳ではない。京都の六地藏参（現・六地藏めぐり）はもともと各町のだ蔵祭（現・地蔵盆）と一体化した行事と認識されており、名称も両者を合わせて「地蔵祭」であった（清水2010）。壺井・他2003：p.61は、亀山市曾我部町に関し、「地蔵盆 八月二十三日。この日に水塔婆を持って六地藏（六ヶ村）をまわり、お賽銭を供える。・・・」と報告している。この報告に信を置くならば、亀岡市曾我部町の人々は地蔵盆と六地藏めぐりとを一体的行事と認識しているということになる。亀岡市の六地藏めぐり及び地蔵祭（現・地蔵盆）から但馬地方のだ蔵祭が成立したという本稿の主張は、現在の名称だけ見ると、ありえない話かもしれないが、亀岡市の六地藏めぐりが地蔵祭と一体的行事と認識されていた可能性を考慮すると、さほど突飛な説ではない。

京都各町の現在の地蔵盆は大人が子どもを接待するものであるが、江戸時代の地蔵祭ではそうではなかった。先に引用した通り、鈴木正三『反故集』では「一、京中辻々の地蔵祭、去年より童部³⁰共、見事に致し候。」とあった。また、森本迪菴（戒名：方譽向西）『浄家寺鑑』（1668年刊）には、以下のようにある。

小童群居して地蔵祭りとして致す・・・七月には花洛辺鄙ともに親は子に是を許し、群童には其所を行ぜしむ。是を地蔵祭りと謂習はせる也。（仏教大学所蔵本p.24）

坂内直頼『山城四季物語』（1674年刊）にも以下のようにある。

童子の業として、道のはた辻々の石仏をとりあつめて、地蔵と名付、顔白く色どり、花を手折、供物をささげて、地蔵祭をなすなり。（『続日本随筆大成別巻 民間風俗 年長行事』pp.185～186）

今日の京都では見られないが、子どもによる賽銭強要も行われていた³¹。大蔵虎光『狂言不審紙』（1827年成立）には以下のようにある。

京都二而も七月廿四日ニは、辻ニ有石仏のだ蔵を洗清め、而ニ白粉をぬり地蔵祭り構、地蔵の銭貰と童共はやす。（『日本庶民文化史料集成 第四巻』p.360）

江戸時代の京都に於いて、子どもも地蔵祭の運営に大きく関わっていた³²が、社会変化によって、子どもを大人が接待するという現在の姿に変わってしまった。一方、亀岡市の地蔵盆には子どもが運営に関わるという古態が残ったと考えられる。さらに亀岡市の六地藏めぐり＋各地区のだ蔵祭を但馬地方で受容したため、地区によっては、子ども集団が運営に関わる地蔵盆となったと考えられるのである。（但し、亀岡市の地蔵盆で子どもによる賽銭強要があったとする聞

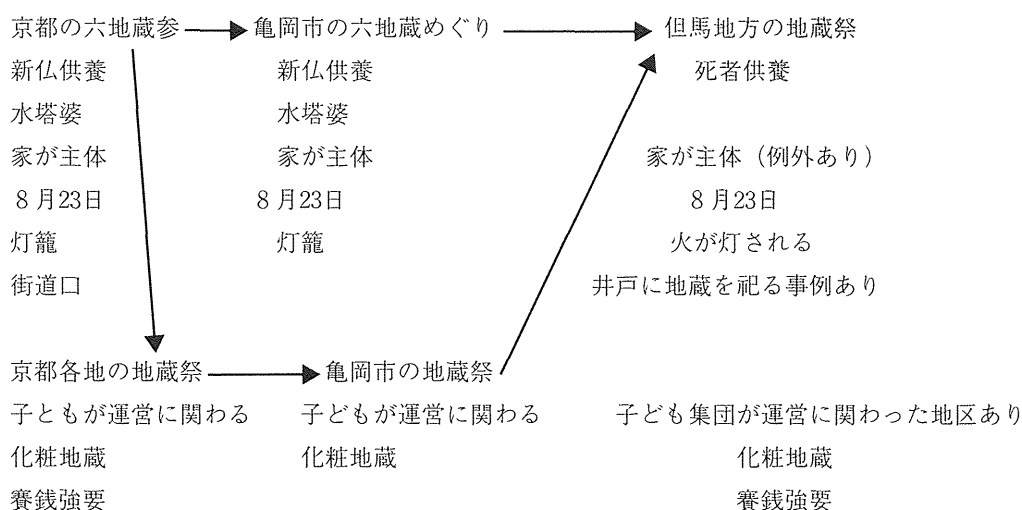
き取り等は存在しない³³。)

なお、但馬地方の地藏盆で、地藏に化粧をすることが見られる（竹野町史編纂委員会1991：p.408）が、亀岡市で化粧地藏が見られる（亀岡市教育委員会2000：p.54・亀岡市文化資料館1994：p.18）ことから、これも亀岡市からの影響と考えられる。

但馬地方のうち、かつての竹野町竹野の地藏盆に於いては井戸の上に安置された地藏³⁴を子どもが祀る、という珍しいものもあった（前述）。井戸は境界の意であろう。江戸時代以降の京都六地藏³⁵も各々、街道口という境界（磯村1994）³⁶にあり、これを模倣した亀岡市の六地藏めぐりの対象となる、各地蔵も境界性を有していると認識されていたと推測できる³⁷。

無論、亀岡市の六地藏めぐり・地藏盆及び但馬地方の地藏盆、双方とも新暦8月23日に行われる行事である。また、亀岡市の六地藏めぐり・地藏盆→但馬地方の地藏盆という説が正しければ、但馬地方の地藏盆で、火が灯される理由は、愛宕信仰との習合でなく、亀山市の六地藏めぐりで灯笼が飾られる（亀岡市教育委員会2000：p.59）ことからの影響を想定すべきだろう³⁸。

以上、亀岡市の六地藏めぐり（及び現・地藏盆）と但馬地方の地藏盆との共通点を述べ、但馬地方の地藏盆が亀岡市の六地藏めぐり・地藏盆の影響を受けて成立したとする根拠を述べた。清水2010を踏まえ、京都との関係を含めて、試みに図示すると、以下のようになる。



* 地藏祭は現・地藏盆の意。京都の六地藏参は、京都各地の地藏祭と一体的行事と見なされ、名称も合わせて地藏祭であった。亀岡市に関しては、地藏盆の中に六地藏めぐりが含まれるとする報告あり。* 8月23日は新暦の意

なお、但馬地方の村人は西国観音霊場順拝を行うこともあった（日野西1972）。西国観音霊場の一つに亀岡市曾我部の穴太寺がある。亀岡市曾我部の六地藏めぐりは最初（もしくは最後）

に穴太寺に参ることを伴っている（亀岡市史編さん委員会1996：p.542・亀岡市行事食研究会1990：p.46・宇田川2004：p.169）。したがって、西国観音霊場巡礼に於いて、亀岡市曾我部の六地藏めぐりを見聞きたであろうゆえ、これを機に伝播した可能性を想定できる。

しかしながら、亀岡市の六地藏めぐりと但馬地方の地藏盆とは大きな相違が2点ある。一つは、亀岡市では、6カ所の地藏をめぐるとし、但馬地方では地区の地藏に詣るが、多くの場合、6ヶ所ではないことである。しかし、これは但馬地方各地区には6カ所も地藏がないこと、即ち六地藏めぐりを設定したくともできなかったことを原因として生まれた相違と解釈できる。亀岡市土ヶ畑では、8月24日に「送り盆と称し、ミバカ³⁹へ参り、六道地藏にオハギを供える」（亀岡市史編さん委員会2008：p.414）行事が行われている。これも六地藏めぐりの変形であろう。同様に亀岡市旭町では、「美濃田以外は六地藏を巡らない。杉や広保、八木町方面の地藏を巡る」（亀岡市文化資料館1994：p.22）。京都府京丹後市弥栄町では、「大正末期までは地藏巡りといい、老人が各寺院に祭られている地藏尊を巡拝し、・・・」（京都府峰山地方振興局1989：p.81）という、これも「6」にこだわらない地藏めぐりが8月23日に行われた。また、兵庫県加古川市別府町では、「八月二十四日・・・新仏のある家は地藏参りといって、海岸線に沿った附近五ヶ所の地藏に順次参詣し、仏の供養をする。」（別府町誌編集委員会1971：p.754・宇野田2004：p.176の指摘による）という5カ所参りが見られる。このように、六地藏めぐりが、伝播された地域の地域性によって、「6」と無関係になることはありうる。

もう一つの大きな相違点は、亀岡市の六地藏めぐりは、主に新仏供養であり、新仏を出した家が3年間行う行事であるに対し、但馬地方の地藏盆では、3年間云々は聞かれない点である。新仏への供物は、通例、下げて食べない（新谷2003：p.86）が、但馬地方の地藏盆に於ける供物は、かつては子どもに分配されるものであった（東京女子大学民俗調査団1972：p.97・神戸新聞社学芸部1971：p.249・p.252）。従って、但馬地方の地藏盆の祭祀対象は新仏ではない。亀岡市の六地藏めぐりと但馬地方の地藏盆との相違は、新仏という概念の受容の濃淡によるものとする解釈が可能である。新仏のために特別に棚等祭祀場所を作るかどうかは地域差があり、「それらは歴史上の身分制や社会階層、家族関係、年齢秩序などそれぞれの地域社会が歴史的に培ってきたものを反映している可能性が大なのである」（新谷2003：p.85）とされる。

但馬地方でも「新仏」という概念が多少は受容されていた。8月13日を中心とする盆行事に於いて、初盆の家が特別な事を行うことは但馬地方でも珍しいことではない（大谷大学民俗学研究会1971：p.85）。竹野町切浜では地藏盆の際、「初盆の家は地藏尊にお菓子を供え、死者の供養をするところもある」（竹野町史編纂委員会1991：p.408）が3年云々は記録されていない。さらに竹野町でも「アラジョ棚」を作る地区もある（竹野町史編纂委員会1991：p.391）が、これらは主に須谷の円通寺（臨済宗）の檀家である（竹野町史編纂委員会1991：p.9）。竹野町は両墓制をかなりの時期まで残した地域でもある。円通寺内の墓はラントウバであり、これとは別に須谷には三昧が存在する（竹野町史編纂委員会1991：pp.304～305）。なお、「埋め墓の殯は、三年目の命日に取り除き、焼却することになっている」（竹野町史編纂委員会1991：p.387）ので、新仏

を3年間とする観念はある程度、須谷に於いては受容されていたと云える。但し竹野町では、これ以外にはアラジヨ棚を作る地区は見当たらない。養父町（現・養父市）に関しては、大森の報告による限り、新精霊棚を作る風習はない（大森1998：pp.189～229）。美方郡浜坂町・温泉町（現・新温泉町）に関しても同様である（大谷大学民俗学研究会1971：pp.84～89）。但馬全域を対象とする谷垣1973：pp.87～90でも新精霊棚を作る風習は記されていない。一方、亀岡市では、新精霊棚を作る等、「新仏は普段とは異なった場所で、特別な祭場において、長期間にわたって祀られるのである」（亀岡市史編さん委員会1996：p.537）。長期間とは「新盆から2，3年」（亀山市文化資料館1994：p.13）を指す。

但馬地方では新盆に特別な事を行うにしても、新仏を別に祀るといった風習は強くは伝播せず、ゆえに亀岡市の六地藏めぐりの影響を受けつつも、3年間は特別な行事を行うといった風習は受け入れなかったのではないだろうか？

以上、但馬地方の地藏盆は、亀岡市の六地藏めぐり（＋地藏盆）の影響を受けて成立したとする説の論拠を示した。両者には相違点も目立つが、相違点は受容に当たっての但馬地方各地区の地域性によるものであるとする解釈を示した。とすると、但馬地方の地藏盆は、単純に祖霊を祀るものとしてしまって良いのだろうか？亀岡市の六地藏めぐりは主に新仏を供養するものであった。それを受容しているのであれば、もともと但馬地方の地藏盆は未だ祖霊になっていない霊を供養するものではなかったのだろうか？と云ってしまっているのは、亀岡市の六地藏めぐり→但馬地方の地藏盆という説のみが論拠ではない。但馬地方でも、8月15・16日に送り盆が行われ、一旦この世に迎えられた祖霊は、あの世に送られてしまっているからである。

4）名称

本稿では特に断り無く、竹野町に関し、地藏盆という名称を使ってきた。これは、竹野町での聞き取り及び竹野町史編纂委員会1991・竹野町教育委員会2005に「地藏盆」とある事によっている。ただ、事態はそう単純ではない。前述の如く江戸時代の記録では地藏祭とあった。また、但馬地方の民俗を分析した谷垣1973：pp.106～109では、「地藏祭り」という節が立てられている。さらに但馬地方南部に位置する兵庫県朝来市では、現在でも8月22・23日に和田山地蔵祭が行われる（大森1998：p.18）。

先に述べた通り、京都の地藏盆は、かつては地藏祭（もしくは地藏会）と呼ばれ、六地藏参と一体的行事として捉えられていた。

地藏盆の名称を巡っては先行研究の論議の対象となってきたが、清水2010では、シンプルに江戸時代の京都では地藏祭と呼ばれ、廃仏毀釈で一旦中断、復活以降、地藏盆と呼ばれるようになった⁴⁰とのみ論じた。

ただ、本稿で、竹野町でも地藏祭から地藏盆と名称が変わったことを確認すると、やはり一言言いたくなってくる。

本稿の分析によれば、竹野町の花蔵祭は、亀岡市の六地藏めぐり（＋地藏盆）の影響の元に

成立したもので、盆行事とは本来、無関係のものであった。しかし、六地藏めぐりから死者供養の面を継承したため、盆行事の一環として理解されるようになり、結果、いつしか地藏盆と呼ばれるようになったと考えることが可能であろう。このことは竹野町では概して8月23・24日に盆踊りが行われることや田久日に於ける、盆小屋を24日まで維持し、仏を送ってから壊すという風習（竹野町史編纂委員会1991：pp.407～408）、森本では8月23日を盆明けと呼ぶこと（前同p.227）からもうかがわれる。

地藏盆を盆行事の一環とすることは他の地域でも同様である。まず、但馬地方を取り上げると、朝来郡（現・朝来市）多々良木では、地藏盆を「盆じまい」としている（多々良木地区民俗資料調査団1972：p.73・8月16日は「ホトケサンオクリ」）。但馬地方では地藏盆の際に盆踊りが行われることは前述したが、該当場所の一つとして、養父郡（現・養父市）大屋町が挙げられる（東京女子大学民俗調査団1982：p.97）。当地でも8月16日に仏送りが行われるが、明治の末まで大字筏では8月14・15日に盆踊りが行われていた（前同p.96）。無論、地藏盆に於ける盆踊りが始まった時期は定かではないではないにしろ、現在は地藏盆という仏送りの後に盆踊りが行われること、かつては地藏盆と関係なく仏送りの前に盆踊りが行われていたことがおおそ確認できる。但馬地方外に話を移すと、既に清水2010で、滋賀県守山市吉身や大津市材木町で聞かれる「地藏盆が終わると盆が終わる」（林1997：p.75）という事例や大阪府能勢町の、8月24日を送り盆と呼び、当日は「15日朝に送ったソンジョサンがあの世界に着く日である」（森1998：pp.135～136）を紹介した。さらに今回見つかったのは、亀岡市で新仏の棚を地藏盆の日まで残しておく（宇野田2004：p.175）事例である。さらに「地藏盆をウラボンとかアトボンと呼ぶところが丹波・丹後にある。・・・野田川町（註一現・京都府与謝野野田川町）・大宮町（註一現・京都府京丹後市大宮）には、初盆に当たり高灯籠を新調するならわしがある。その高灯籠は7日盆に出され、8月13日の朝から16日朝まで墓地に立てて毎夜点灯し、その後家に持ち帰って23日まで門先に立てて置く。」（植木2009：p.361）これ以外にも、8月24日を「ウラボン」と称し、盆の終わりとする地域は多い（水口1984：p.134・宇野田2004・林2008：pp.116～117）。但馬地方に近い、兵庫県多紀郡（現・篠山市）丹南町古市では、地藏盆に際し、盆踊りが行われるが、その心意は「盆が無事にすみしました」といって仏さんに感謝するもの」（神戸新聞社学芸部1971：p.251）である。つまり、もともと新暦8月23・24日（旧暦7月23・24日）に地藏を祀る行事（地藏祭・地藏会）は、盆行事と別物だった⁴¹ののだが、時代が下るにつれ、盆行事の一環と考えられるようになった。こうして地藏祭⁴²・地藏会が地域によっては地藏盆と呼ばれるようになったと考えられるのである。多少、本稿とは視点が異なるが、伊藤曙覧1958は、富山県氷見町（現・氷見市）の地藏祭が新暦8月20日前後に行われ、時に地藏盆と呼ばれるようになったことから、地藏祭→地藏盆という名称の変化を以下のように説明している。

（補一旧氷見郡地域の）農村に於て古くから地藏縁日の二十四日に（補一地藏祭は）多く行われ、町では逆に乱れ統一性の乏しいことが知られる。しかし氷見の地藏祭は明治時代には廿四日に行われていたのである。それでは何故統一性を失ったのであろうか。それは

都市的気風というより町の盆送り習俗に基づいている。氷見町の盆送りは現在殆ど廿日頃行われ、盆の終了日がこの地藏祭日となり、盆踊りや盆飾り取除きもこの日をもって終了する。・・・人々のお盆への心持もこの日を境に急激に衰える。つまり精霊送りの観念が強くなっており、「地藏盆」と称するも無理からぬ如く思える。(p.17)

なお、地藏盆という言葉は『日葡辞書』・各種『節用集』及び管見の及んだ中世史料⁴³になく、江戸時代以降の言葉である。『日本国語大辞典』では、1904年の用例が挙がっている。但し、林2008：p117は1832年の用例を確認しており（『五箇荘町史』p.830）、地域によっては、江戸時代から使われていた。

まとめ

清水2010に増して、推測に推測を重ねる結果となったが、おおよそ以下のことは云えそうである。聞き取りによると、兵庫県豊岡市竹野町竹野・須谷の地藏盆は、先祖供養を目的としており、祖霊祭であった。この点は大森説を裏付ける結果となった。また、竹野町竹野・須谷の地藏盆は、子どもを大人が接待し、子どもが自由に遊ぶという要素が皆無であった。さらに竹野町竹野・須谷の地藏盆は、家族で行う行事であった。そのため、現在の姿を見る限り、京都の地藏盆とは全く別物と考えるべきである。

竹野町の地藏盆は、孤立事例ではなく、地域差はあるが、おおよそ但馬地方に共通するものである。では但馬地方の地藏盆はどこから発生したかと云うと、本稿では、亀岡市の六地藏めぐり（＋地藏盆）の影響という説を唱えた。亀岡市の六地藏めぐり（＋地藏盆）は京都の地藏祭の影響を受けて成立したものであるゆえ、京都の地藏祭が伝播・受容の過程で変容して、但馬地方の地藏盆となったという説である。無論、京都の地藏祭も社会変化によって、地藏盆と名称を変え、その中身も変化した面もある。

これで清水2010からの宿題は果たしたのかもしれないが、かえって大風呂敷を広げただけな気がする。今後も各地の地藏盆調査を続け、清水2010・本稿の修正を行う予定なので、読者諸氏のご寛容を願う。

参考文献 ＊著者と発行元とが同じ場合、発行元は省略した

浅野喜市2010『昭和の京都』光村推古書院

安達俊英1989「地藏盆」中村元編『仏教行事散策』東書選書 pp.214~220

天野武1996『子どもの歳時記』岩田書院 ＊初版1984

生野町文化財調査委員会1968『朝来郡生野町上生野地区民俗資料緊急調査概報』

井ヶ田良治1984『近世村落の身分構造』国書刊行会

磯村有紀子1994「中世の京都と六地藏」『滋賀史学会誌』8号 pp.3~20

伊藤曙覧1958「富山県氷見地方の地藏調査」『仏教と民俗』pp.15~21

伊藤曙覧1959「地藏盆の名称」『仏教と民俗』4号 p.43

- 伊藤唯真1978「盆棚と無縁棚」大島建彦編『年中行事』有精堂 p.113～130
- 植木行宣2009『舞台芸能の伝統』岩田書院
- 鵜飼均2002「盆と祖先祭祀」八木透編『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂 pp.181～201
- 宇野田綾子2003「福井県小浜市尾崎の地藏盆」『西郊民俗』182号 pp.16～24
- 宇野田綾子2004「盆月二十四日と地藏信仰」『民俗学研究所紀要』28集 pp.182～191
- 江馬努1922『日本歳時史 京都の部』内外出版
- 大谷大学民俗学研究会1971『美方郡の民俗』
- 大森恵子1998『年中行事と民俗芸能』岩田書院 *各論文の初出は同書参照
- 加藤純二1995『未成年者禁酒法を作った人 根本正 伝』銀河書房
- 金沢市教育委員会1997『金沢市の地藏尊』
- 亀岡市教育委員会2000『亀岡の歳時記』
- 亀岡市行事食研究会1990『続亀岡の行事と行事食』亀岡市生活改善グループ行事食研究会
- 亀岡市史編さん委員会1996『新修 亀岡市史 資料編第四巻』
- 亀岡市史編さん委員会2002『新修 亀岡市史 本文編第二巻』
- 亀岡市史編さん委員会1998『新修 亀岡市史 資料編第五巻』
- 亀岡市文化資料館1994『京都の盆行事と芸能』
- 京都府峰山地方振興局1989『丹後6町のまつり100』
- 熊本大学文学部総合人間学科民俗学研究室2010『うと地藏祭り』
- 黒田正子2002『京都の不思議』光村推古書院
- 神戸新聞淡路総局1983『淡路祭事記365日』神戸新聞出版センター
- 神戸新聞社学芸部1971『兵庫探検 民俗編』
- 五個荘町史編さん委員会1992『五個荘町史 第1巻 古代・中世』
- 小林信子1975「子どもの生活と地域」日本生活学会『生活学 第一冊』ドメス出版 pp.251～292
- 斎藤槻堂1974『日本の民俗 福井』第一法規
- 佐野恵子2004「京都の地藏盆」京都映像資料研究会編『古写真で語る京都』淡交社 pp.76～77
- 島田芳行1991「栃木市国府町萱場の地藏祭」『下野民俗』32号 pp.69～76
- 趣味と遊覧社編1936『盆と地藏祭』
- 新谷尚紀2003「盆」同・他編『暮らしの中の民俗学』吉川弘文館 pp.64～96
- 鈴木棠三1977『日本年中行事辞典』角川書店
- 高橋渉1981「京都の「六地藏参り」」『宮城学院女子大学研究論集』55号 pp.1～20
- 竹内泰・布野修司1999「京都における地藏の配置に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』520号 pp.263～270
- 竹田聴洲1993「廻り地藏と御輿番」『村・同族・先祖 竹田聴洲著作集 第八巻』国書刊行会 pp.384～390*初出は1953
- 竹野郷土研究会1979『竹野郷外史 2』

- 竹野町教育委員会2005『竹野町文化財調査報告書 第17集 竹野町文化財悉皆報告書』
- 竹野町史編纂委員会1990『竹野町史 通史編』
- 竹野町史編纂委員会1991『竹野町史 民俗・文化財・資料編』
- 多々良木地区民俗資料調査団1972『多々良木』
- 田沼武能2009『子ども組』新日本出版社
- 鳥越憲三郎1977『歳時記の系譜』毎日新聞社
- 田中久夫1976「兵庫県の歳時習俗」堀田吉雄・他『近畿の歳時習俗』明幻書房 pp.255～322
- 田中久夫1986『仏教民俗と祖先祭祀』神戸女子大学東西文化研究所
- 谷垣桂蔵1973『但馬の民俗 年中行事[二]』兵庫県立但馬文教府
- 田野登1994『大阪のお地蔵さん』北辰堂
- 千葉保1990『但馬 ふるや』古谷自然村の会 *古谷は1972年に廃村
- 壺井裕子・前田尚美・吉川紗弥加2003「年中行事（京都府亀岡市曾我部町穴太の民俗）」『史園』4号 pp.50～64
- 東京女子大学民俗調査団1972『奥但馬の民俗』
- 利光有紀1990「京都のお地蔵さま」『季刊文化人類学』53号 pp.59～69
- 長尾智子・他2002a「近代京都の地蔵安置の変遷」『日本建築学会近畿支部研究報告集』pp.485～488
- 長崎県教育委員会文化課1978『長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅱ）』
- 萩原秀三郎・須藤功1985『日本宗教民俗図典』法蔵館
- 橋本芳雄1987「氷見市の地蔵祭り」『氷見春秋』16号 pp.31～42
- 服部清道1972『板碑概説』角川書店 *初版は1933
- 服部比呂美2010「福井県小浜市西津地区の地蔵盆」『子ども集団と民俗社会』岩田書院 pp.237～275 *初出は2005
- 林英一1993「地縁の祭祀の様態2」『近畿民俗』131・132号 pp.37～54
- 林英一1995「綾瀬における地蔵信仰」『綾瀬市史研究』2号 pp.31～46
- 林英一1997『地蔵盆』初芝文庫
- 林英一2008「明治政府の近代化政策と地蔵盆」『日本民俗学』255号 pp.105～120
- 日野西眞定1972「近世における但馬農民の霊場順拝」奥村隆彦・他編『沢田四郎作博士記念文集』pp.140～149
- 伏見のまちづくりを考える研究会1987『子育ての町・伏見』都市文化社
- 福井県教育委員会2004『朝倉街道・鯖街道』
- 福知正温1993『亀岡風土記』亀岡市民新聞社
- 別府町誌編集委員会1971『加古川市誌 第二巻』
- 松崎憲三1977「六箇の廻り地蔵」『西郊民俗』78号 pp.4～9
- 真鍋広済1932『地蔵説話の研究』顕真学苑

真鍋広済1959『地藏尊の世界』青山書院

真矢都2004『京のオバケ』文春新書

水口純一1984『哀れ消えゆくものの日々』第一法規 *現・京都府南丹市日吉町のうち、日吉ダム（1971年建設開始）による水没地域の記録

柳田国男編1939『歳時習俗語彙』岩波書店

柳田国男1970『定本柳田国男集 第三十一巻』筑摩書房 *引用文章の初出は1947

藪田喜一郎1933「六地藏廻りについて」『京都』2巻2号 pp.7～13

山路興造1992「京都の盆行事」『京都歴史資料館紀要』10号 pp.297～322

吉川幸次郎1978『論語（上）』朝日新聞社

吉村亨1995「レポート「京都の地藏盆」（Ⅰ）」『京都文化女子大学紀要』23号 pp.89～122

渡浩一1983「中世地藏説話概観」『東洋大学大学院紀要』20号 pp.85～93

参考HP

玄さんブログhttp://blogs.yahoo.co.jp/toyooka_kankou/archive/2010/9/8 最終閲覧日2011年10月24日

*「玄さん」は兵庫県豊岡市のマスコットキャラクター。名前は玄武岩から由来。

きむの、ちょっとした話、豊岡での日々 <http://blogs.yahoo.co.jp/kohmas501/352563.html> 最終閲覧日2011年10月24日

長尾智子2002b「近代京都における地藏の変遷」

<http://www2.kpu.ac.jp/ningen/culture/member/nagao/nagao.pdf> 最終閲覧日2011年10月25日 *aとbとはほぼ同一内容だが、bの方がやや詳しい。

*引用文中の註・補は原則引用者による（例外は註記した）。

*本論文は科学研究費補助金・基盤研究C・課題番号22520060「「路傍の地藏」の宗教史的考察」の研究成果の一部である。

註

¹ この場合の「京都」は平安京域を中心とし、江戸時代に町が形成された地域を指す。

² 先行研究では、地藏盆の分布は、京都が一番密接で、近畿地方に於いて盛んに行われ、近畿地方を離れると、かなり希薄になって行くことが示されてきた（田中1986：pp.118～119・安達1989：p.214・服部比呂美2010：p.237）。ここから文化周囲論を適用した。無論、文化周囲論の適用は私の独創ではなく、既に林1997：p.7が「「地藏盆」と称される行事は伝播・受容という現象を通して広がったとみることができよう」と述べている。但し、全国各地に散在する地藏盆が全て京都を源としているかどうかは定かではない。

³ 「地区」という言い方は竹野町史編纂委員会1991で使われているので、これに倣った。竹野町教育委員会2005では、「南地区・中地区・竹野地区」と分けた上で、下位区分として、本論文で云う各地区の報告がなされている。但し、竹野町史編纂委員会1991と竹野町教育委員会2005

とでは地区の区分が幾つか異なる。「39」という数字は竹野町教育委員会2005による。

⁴ 但し、和田にはもう1カ所地蔵がある（「六体地蔵と地蔵」竹野町教育委員会2005：p.54）ので、こちらに対しては何かが行われた可能性はある。

⁵ くるま堂には、かつては地蔵盆の際、牛飼いの人々が参った。竹野町史編纂委員会1991:p.409

⁶ 須佐の地蔵盆に関して云うと、円通寺内の墓に墓参りをしているように見えたが、実見後、円通寺内の墓は両墓制の第2次墓に位置づけられるものである（竹野町史編纂委員会1991：p.305）ことを知った。須佐の地蔵盆における墓参りの位置づけは再調査の必要があることを述べるに留める。

⁷ 無論、京都各地で行われる地蔵盆全てを調べられるはずはないので、これまでの調査報告書等による。と言いつけているのは、京都の地蔵盆の行事日程を見ると、寺へ行って僧の説法を聞くことが組み込まれている場合が多い。この際、寺内部の墓に墓参りをしている可能性がありうるからである。今後の聞き取り調査では気をつけたいと思う。

⁸ 竹野町史編纂委員会1991：p.411で、浜須井では「子供会と婦人会とが分配する」とあり、他地区でも、供物・賽銭が子ども間で分配される（前同）ことを以て、「子ども集団」とした。竹野町の多くの地区で子供組が組織されていたが、現在は子供会となっている。竹野町町史編纂委員会1991：pp.203～208

⁹ 竹野町教育委員会2005：pp.29～30の神原に関する箇所では地蔵盆・地蔵講に言及がない。ゆえに「かつては」という表現をとった。

¹⁰ 浅野2010：p.102に掲載された1967年の地蔵盆プログラム（富永町）は、「8月23日 1時おやつ 1時半じゅづ回し 2時おやつ 3時金魚すくい 5時おやつ 7時風船割り 24日 午前11時おやつ 午後1時おやつ 3時おやつ 5時福引子供 6時福引大人 7時風船割り」とある。

¹¹ 詳しくは加藤1995参照。なお、加藤の引用する、同法の反対意見（於衆議院）を試みに引用すると、以下ようになる。「未成年者にのみ禁酒を命ずるのは酷ではないか。日本には未成年者に飲酒を強制する習慣もある。」「日本には昔から儀式に酒を用いる風習があるが、これも未成年者には禁止するのか。」「守られそうもない法律を作るとは、国法の権威を失わしめるのではないか。」「十七、八から二十歳までの未成年は成人と何ら異なるところがない。この年齢の未成年に酒の害が特にあるのか。」（pp.193～196）・無論、酒税収入の確保の問題もあっただろうし、酒造業からの要請もあっただろうから、これらの反対意見が当時の風潮そのものではないにしても、ある程度、当時の未成年飲酒の実態を読み取ることはできよう。なお、加藤1995：pp.204～206は、長年同法に反対していた貴族院が賛成に回ったのは徳川家達議長尽力ではないか、としている。周知の通り、徳川家達は徳川16代目であるとともに、1919年まで、柳田国男の上司であった。

¹² 年中行事の項目と簡単な説明が竹野町史編纂委員会1990：pp.373～376に活字化。

¹³ 利光1990：p.60・吉村1995：pp.117～118

¹⁴ 清水2010では、文献初出を『案内者』1662年刊行、地藏祭の始まりを寛文年間（1661～1673）としたが、訂正する。

¹⁵ 『米原町史 資料編』「第四章 近世」には、当該の行事を地藏会（式）と呼称している文書が2件収められている（pp.426～427・pp.761～762）。後者は服部比呂美2010：p.274の指摘による。なお、地藏会という呼称は江戸時代の京都にも存在した。『京都町触集成 第4巻』宝暦11年7月7日（p.141）・宝暦12年7月21日（p.197）等。

¹⁶ 例えば貝原益軒『続諸州めぐり』では、「（補一敦賀には）米、大豆、材木など多し。かやうのものを、是より京都の方へ人馬にてはこび、近江の貝津（註＝現・滋賀県高島市マキノ町海津）へ出し、貝津より舟に積て、大津のかたへつかはす。又京都より諸の買物を大津へ出し、大津より船にのせて貝津へつかはし、貝津より爰にくだすゆゑ、王令の人馬甚多してやむことなし。・・・敦賀より京へ上する米、材木等、これ（註＝貝津）迄出し、舟にて大津へやる故、人多、舟多し」（『益軒全集 第7巻』pp.141～143）とあり、近江と京との交流が盛んであったことを記している。

¹⁷ 京都の地藏盆に於いて地藏に化粧を施す事が必須という訳ではない。真矢2004：pp.82～83・なお、化粧に関して、前稿の訂正を行う。前稿では、六地藏めぐりの対象となる6体のうち、白を基調とするのは伏見地藏（大善寺）・鞍馬口地藏（上善寺）・桂地藏（地藏寺）と述べた。2011年8月22日に再度六地藏めぐりに参加した結果、鞍馬口地藏（上善寺）は白を基調とせず、残り5カ所は全て白を基調としていた。謹んで訂正する。この誤りは清水2010執筆にあたり、2010年10月に六地藏めぐり6カ所に赴いたところ、多くは小さな窓からでしか地藏像を見ることしかできなかったことを原因とする。即ち、各地蔵像を見ることができるのは、六地藏めぐりが行われる8月22・23日のみと思った方が良い。

¹⁸ 但し、現代の小浜の地藏盆に於いては、京都の「大人が子供を接待する」という特徴はあてはまらず、子ども集団主体の祭りとなっている。服部比呂美2010：pp.268～p.269は「子どもたちを楽しませるレクリエーションであった京都の地藏盆のあり方と小浜のそれとは微妙に異なっているようである。」と述べている。続けて服部は「京都のような都市部では子どもが集団的に行う年中行事が少なく、年齢階梯的な社会組織が機能しにくかったのに対し西津地区（註一小浜の地名）のような漁村の子ども集団には、いわゆる子ども組の上に続く若者組的組織が意識され、子ども集団の行事にも年齢階梯的な組織が生じたのではなからうか」と述べ、この相違は、都市と漁村という地域差の反映としている。本稿後述の通り、江戸時代、京都の地藏祭は子どもも運営に大きく関わっており、これが服部の云う理由により、小浜では子ども集団が運営に関わるようになったと考えられる。なお、江戸時代、小浜の地藏祭では、子どもたちによる賽銭強要が行われた（服部比呂美2010：p.252）が、江戸時代の京都の地藏盆でも子どもによる賽銭強要が行われることもあった（本文後述）。ちなみに中間地点である、近江では、現在、多くの地区で大人が接待する形が見られ（林1997:pp.41～42）、かつては子どもによる賽銭強要があったことが確認される地区も幾つかある（林1997:p.35・p.92）

- ¹⁹ 「鯖街道」という名称自体は近年のものではあるが、若狭と京都との結びつきは古より強かった（福井県教育委員会2004：p.69）。
- ²⁰ 註16参照
- ²¹ やや例外として、豊岡市金剛寺の地藏盆が挙げられる。「（補一子どもは）自分が祭る地藏に線香を立てて喜んでた。このように適当に子供達は遊んでいたということである」（林1997：p.205）但し、大人が子どもを接待するものではない。
- ²² 中川喜雲『案内者』には、「地藏祭・・・六地藏の外にも供物灯明参詣あり」（近世文学資料類従・仮名草子編9・pp.210～211）とあり、滝沢馬琴『羈旅漫録』には、「前には灯明挑灯を出し」（日本随筆大成版第1期第1巻p.233）とある。
- ²³ 例えば『地藏菩薩靈驗絵詞』（1453年には原形成立・古典文庫所収）の末尾にある「地藏靈驗所」（＝日本全国有名地藏靈驗所一覧）でも但馬国は一カ所も挙がっていない。服部清道1972：pp.375～376・pp.556～557で挙げる、中世各地の地藏講でも但馬地方の事例はない。管見の及んだ中世説話でも、但馬を舞台としたものは無かった（渡1984を基に、その後活字化されたものもチェックした）。中世の地藏説話の集大成を試みたとされる『三国因縁地藏菩薩靈驗記』（1684年刊）全152話のうち、但馬国を舞台とするのは僅か1話（巻4第9話）である。舞台は「山森」だが、不詳。即ち、他の多くの話と異なり、著名な地藏像の靈驗譚ではない。
- ²⁴ 高橋1981では「六地藏参り」とあるが、山路1992では「六地藏巡り」とする。六地藏会が2009年に発行した公式パンフレットは「京の六地藏めぐり」というタイトルである。
- ²⁵ 『日本国語大辞典』に挙げられる用例では、1809年刊『本朝醉菩提全伝』のものが最も古い。
- ²⁶ 『論語』学而篇「三年父の道を改める無きは、孝と謂う可し」はこれに由る。もともと「足かけ三年であって、実は二十七ヶ月、もしくは二十五ヶ月」（吉川幸次郎1978：p.37）の意であるが、日本の仏教民俗ではこうした意は適用されていない。
- ²⁷ 『京都府ことば辞典』にも記述はなく、方言という認識もないようである。
- ²⁸ 高橋1981：p.10は、京都の六地藏めぐりを「非組織的な信仰」としている。
- ²⁹ 亀岡市文化資料館1994：p.18・亀岡市史編さん委員会1996：p.540・亀岡市教育委員会2000：p.52の3書いずれも亀岡市の地藏盆の運営に関わったのは一子ども組等「子ども集団」ではなく「子ども」とするが、吉村1995：p.106では、亀岡市保津町西馬場の地藏盆は子供会の行事とする。いずれも子どもによる供物分配を記していない。亀岡市史編さん委員会1996を見る限り、亀岡市で子ども組等子ども集団が造られた形跡はない。
- ³⁰ 「童部」は「京童部」の意の可能性もあるが、それにしても若者であろう。
- ³¹ 『季寄新題集』（1848年刊行）に「地藏銭 地藏会のあつめものなり」（『近世後期歳時記本文集成並びに総合索引2』p.1089）とある。著者・千艸に関しては不詳（前同p.48）。京都書林を版元としており、京都では季語として「地藏銭」という言葉が使われていたことは確認できるが、この「地藏銭」が賽銭強要によるものかどうかは不明。
- ³² とはいっても、「京の町々地藏祭りあり。一町一組主年寄の家に幕を張り、地藏菩薩を安置

し、・・・酒もりしてあそべり。・・・年中町内のいひあはせもこの日にするといふ」（本文で既に引用・滝沢馬琴『霧旅漫録』日本随筆大成版第1期第1巻p.233）という記述から、大人が準備する、町の行事であったと云える。

³³ 子どもに供物を分配することは行われている（亀岡市史編さん委員会1998：p.238・亀岡市行事食研究会1990：p.47）。これが賽銭強要の名残の可能性はあるが、註29で述べた通り、子どもによる分配ではないので、可能性を指摘するに留める。

³⁴ 井戸に関連して地蔵が祀られることは他地域でも見られる。服部比呂美2010：p.270・本稿で問題とするのは井戸の上の地蔵に対し、地蔵盆行事が行われることである。

³⁵ 磯村1994は室町時代の京都六地蔵と江戸時代の京都六地蔵とを「洛外六地蔵」・「洛内六地蔵」として区別する。

³⁶ 境界性の補足として、現在、京都の六地蔵めぐりに於いて購入される地蔵幡は、家の玄関口という境界に飾られ、悪病退散の功德があることが挙げられる。この風習は1932年まで遡れる（真鍋1932：p.145・薮田1933：p.12）。但し、江戸時代の文献では確認できず、明治以降に始まった風習の可能性もある。

³⁷ 通説では、路傍の地蔵像は辻等「境界」に立てられるとされており、江戸時代の京都でもこのことはおおそ当てはまる（竹内・布野1999：p.267・但し、現在の京都では当てはまらない事例が多い）。しかし、全国各地の地蔵像を調べてみると、必ずしも境界に立てられるとは限らない。私は東京都板橋区・練馬区・杉並区・中野区域の路傍の地蔵像調査を行ったが、村境に立てられたものは例外的であり、また、疫病退散等の説話を有するものは村境に立てられたものにしか無かった。清水邦彦「東京都23区域西北部の「路傍の地蔵」」2011年9月日本宗教学会第70回学術大会口頭発表。発表要旨は『宗教研究』371号に掲載。詳しいデータに関しては別稿発表予定。亀岡市の地蔵盆を見ると、境界を強く意識した祭りではないゆえ、境界性に関しては、亀岡市の六地蔵めぐりから但馬地方の地蔵盆への影響を想定した。

³⁸ 亀山市の地蔵盆で灯籠・提灯が使われることもあるが、亀岡市千歳町出雲では灯籠・提灯の使用は戦後に始まったとされている（亀岡市史編さん委員会1998：p.237）。

³⁹ 亀岡市土ヶ畑は両墓制であり、ミバカ（第1次墓）とラントウ（第2次墓）と呼ばれている。盆の際、新仏は祖霊とは別に盆棚に祀られる（亀岡市史編さん委員会2008：p.414）。

⁴⁰ 京都で地蔵盆という名称が定着した時期に関してはまだまだ検討すべき問題である。江馬1922：pp.430～431は京都の年中行事に関し「地蔵盆」という言葉で論述をしている（「六地蔵参詣」を含む）が、京都府立総合資料館にのみ所蔵される、趣味と遊覧社1936『盆と地蔵祭』では、京都の六地蔵めぐりの各寺と今で云う地蔵盆が行われている各寺とが紹介されている。即ち1936年でも「地蔵祭」という呼称は残っていたのである。なお、六地蔵めぐりの各寺とそれ以外の寺とでは、特に区別されておらず、1936年段階でも六地蔵めぐりと各地の地蔵祭は一体的な行事として「地蔵祭」とも呼ばれていたことも判明する。但し、題名を見て分かる通り、盆行事との結びつきもうかがわれる。あるいは地蔵盆という名称の定着は、「戦後、地蔵盆が

流行した時期」(長尾2002b)の可能性も考える必要がある。註10で言及した1967年のプログラム(富永町)写真では「地藏盆」とある。

⁴¹ 既に鳥越1977：p.227が「地藏盆も、本来は盆行事に含まれていたものではなかったのである。少なくとも江戸期に入ってから以降の民間信仰の中で、形成されていったものとみてよいと思う」と述べている。但し、鳥越は名称の変化には気づいていなかった。この点に本稿の意義はあるかと思う。

⁴² 本稿に直接関係するかどうか別として、「地藏祭」(地藏さん祭り等を含む)という呼称が近年まで見られたことが確認される地域を以下挙げておく。なお、地名は論拠発表当時のもの。栃木県栃木市国府町萱場(島田1992)・群馬県玉村町大字箱石(田沼2009：pp.32～35)・神奈川県綾瀬市(林1995)・新潟県村上市村上細工町(天野1996：pp.116～117)・富山県氷見市(橋本1987)・石川県金沢市(金沢市教育委員会1997)・福井県金岡(斎藤1974：pp.152～153)・岐阜県関町(林1997：pp.231～232)京都府丹後町(京都府峰山地方振興局1989：p.61)・京都府峰山町(京都府峰山地方振興局1989：p.16)・兵庫県養父郡大屋町古谷(千葉1990：p.122)・兵庫県多紀町市野々(田中1976：p.308)・兵庫県津名郡北淡町(神戸新聞淡路総局1983：p.137)・香川県綾歌郡宇多津町多津町田町(林1993：pp.43～45)・長崎県長崎市太田尾町・同飯香浦町(長崎県教育委員会文化課1978：p.6)熊本県宇土市(熊本大学文学部総合人間学科民俗学研究室2010)・宮崎県宮崎市中村(鈴木1977：p.547)。柳田1970：p.192は「全国何れの地に行っても地藏祭で通って居る」と述べているので、まだまだ調べれば、地藏祭という呼称は見つかるかと思う。

⁴³ 註23参照。